



東流軒のありに暖日子のあふる
てはまの江と世帯の作力あり。世帯の
通も志厚く美鶴と所由をたねの
入て凡に十有余年ね凡に月のかひと
事へたては法業と子孫は清く二十
余年のそと家山と重原福所の
ふれとあひ天の福金とやうに

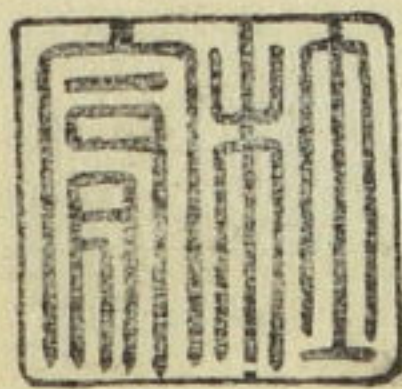
[illegible]

けし程清凡士よりこの将軍は集巻を不冊
とふらん 序せよと云ふ需れ七四甲百
余年の親交よりふらふかたや腐毫
と云ふあまも交はさる 酬報の云ふ
あにこ

蘇店主人

二十時寢殿十一

未
初
秋



各々句 又思

やの魂 夏書 三つを 三つを

夏に寺

文蔵坊

常盤や 思ひ 思ひ 思ひ

思ひ

月夜坊

世に 友を 思ひ 思ひ 思ひ

思ひ

茶屋坊

名 祐 祐 祐 祐 祐

祐

竹河坊

音と 入る 思ひ 思ひ 思ひ

思ひ

時春坊

親 友 や 今 思ひ 思ひ 思ひ

思ひ

升里

亡 魂 の 思ひ 思ひ 思ひ

通凡

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

樂又

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

秋江

常 盤 思ひ 思ひ 思ひ

李曉

友 友 思ひ 思ひ 思ひ

井田

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

秋雨

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

文林

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

権凡

心 向 思ひ 思ひ 思ひ

買里

る里のてなや牡丹の花もふ

非吹

ふかられたるも花もひもふ

日下
乙嫁

ふてふふふはふしてふふふ

そ乙

はくはくはくはくはくはく

一調

その花をふふふふふふふ

少
枕里

涼しうしうしうのふふふ

夢由

花もやふふふふふふふ

片羽

ふふふふふふふふふふ

子登

さくさくのふふふふふ

改
以隆

ふふふふふふふふふ

交健

ふふふふふふふふふ

益机

ふふふふふふふふふ

益四

ふふふふふふふふふ

僧
仙菜

ふふふふふふふふふ

竹葉

ふふふふふふふふふ

麦乙

ふふふふふふふふふ

同
呂謝

佛の心は空かしくしてありて啼く

ト万念

東壺

懐く思ふ心も美如月涼し

ト万念

東明

幽玄の海に心は清くし

宇曲

笑の心は空しくしてありて

ト万念

本居

常盤木に心は空しくしてありて

鹿夕

一戸の心は空しくしてありて

冬古

糸の心は空しくしてありて

巳首

むの心は空しくしてありて

荻洞

ひまの心は空しくしてありて

拓芝

むの心は空しくしてありて

丹菱

あつた心は空しくしてありて

研川

あつた心は空しくしてありて

隊雨

あつた心は空しくしてありて

乙丘

あつた心は空しくしてありて

由仁

あつた心は空しくしてありて

山栗

あつた心は空しくしてありて

山更

致

鳥吟

吟
松

此
說

不
此
不

士琴

谷合
望榮

文里

可夢

高升

里水

尊統

升

奇由

記

宋荊

あのかへに膽やとれまの更天王 兔兎 曉

一戸を魂あふのうけまに 巴江

廣くくけも呼致帳ふ 此紅

面影のつるまきく一夏の月 柳士

青くの子向ふはるまきふ 栗邱 松樹

青とつるまきも新また家ふ 本母

松のまふもあやそふの凡ふふ 一養

晴ままてぬけふあふまふ 西に 東方

くく夜のまふ浮世をきふ 大匠 奇奇

鳴呼月の新原くくも無時 ナコヤ 千千芳

まふ根とまひおのぬやふ 水 風水

けのまふえきふに月ふ 互 互互

あまふあ焼く香も満つ風の香も 以以 幸

まふ人ともくくかきふ 九 九

一戸のふきふくくはきふ 可 可可泉

まひや折も折ふかしふ 李 李李 蹊

み子なるやかきて是夜へおれ

谷口

孝文

友のまもふゆやうき路を

雨栗

あききよきやあきくく木下宮

桂文

あきくくあきやあきくくあき

三保

あきくくあきくくあきくくあき

此堂

あきくくあきくくあきくくあき

大梅

あきくくあきくくあきくくあき

公海

あきくくあきくくあきくくあき

西湖

あきくくあきくくあきくくあき

平門

孝文

あきくくあきくくあきくくあき

半場

あきくくあきくくあきくくあき

壺外

あきくくあきくくあきくくあき

如仙

あきくくあきくくあきくくあき

祈子

あきくくあきくくあきくくあき

む川

あきくくあきくくあきくくあき

こみ

あきくくあきくくあきくくあき

湖由

「さうさうと涼しげに」

多枝

「さうさうと又静かに」

表鏡

「雄の子向うもよき」

卷耳

「静かにやうのうは」

文司

「くさくさやうな新葉」

梅庵

「静かに家へ向かう」

狸石

「静かに目につく」

杜賓

「さうさうとさうさうは」

親族
う宿坊

「さうさうとさうさうは」

片明

「さうさうと静かに」

少男

「さうさうとさうさうは」

孝志

「さうさうとさうさうは」

たか

「さうさうとさうさうは」

漱石

「さうさうとさうさうは」

田止

「さうさうとさうさうは」

磯夕

秋相吟

秋のふもとの山や山故人の秋お成坊

亡ふ涙をぬく月と霞と 磯夕

にこそは床も肩抱えて 杜若

奥と奥のふたは 芥子

をぬくは 柳ハナのお紋お下し 弁之

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

夕タタきと霞と雨のそとく 危ヒヤ光

鳳
名

等校

時鳥坊

乃報

五鶴行

李子芝

松甫

九

之帆

梅夕

卷四

漱石

所贊

ナ

支讎

心奉

征集

止

芳吟

雨
采

山陰

卷九

冬月五日の事
和文お殿

居るふくはあやかしき

法是之修
四徵ハ之之

遠くは友を信じて一歩を

一毫とありて、雲霞を隔てて生る。

是也言其心之微也
不取

子に於て神を以て其の法を

殘夕

山笑ましくも大の字向
満くちの月歌を
歌よまの音えん
うめさう歌や身はまじ
古えのけけ
ふ月やまのま
ねじ歌の歌
歌石
止
歌
歌
歌
歌

探題

朝のうた
 朝のうたやふれぬそとて嘆
 ちね名の詠を教くまのを
 福是へ晴月とせり麻の戸
 ゐの里に安んずるあし子か
 朝のうたやふれぬそとて嘆

その方へ垣傾くをぬれぬ子	倭風
清の音と云ふやけりやまの朝	花江
みねのや入おにーじき屋寺	史蓮
庭のやうきや浪のよめあは	呂例
朝ふくいそふくても本様か	戸吹
おふハふふかふおふ新ふ	露二
朝ふたふたふとふてやけ	葵乙
一ふてふふれ店のをぬか	文健

百草のふはふけりふふやけ	竹賀
雨のおやふきやて又麻の戸	仙葉
折れてけり人もあふ本様か	菊四
ふふ川と流とふふふふふ	菊机
いけのふふふふふふふ	以隆
柳ふふふふふふふ	こ芳
ふふふふふふふふふ	九
草花やふふふふふふ	以幸

いへたぐんまのうへへ	互雲
杖捨てお祈もたう廿市た	鳳水
とも紙舞やるる店もかれり	麦に
鉦のやほ世のまきといふの	曾枝
小娘のまよふてんふ秋のふ	けき
まは音のほへ振へおのほ	店鉦
あやめよ子のおてんふふ	生草
むしうたのほへもるふてん子	た歌

折ふとつたにふて屋ふふ	漱石
鉦のやあふも川もあふ	梅夕
音のあふとつたにふて屋ふふ	雨栗
あふもふとつたにふて屋ふふ	早山
折ふとつたにふて屋ふふ	残夕

余無

山や月と麻糸をひく

呂洞

ゆき冷めぬ杯のまね

互書

にーゆふと糸糸の水うふくも

麦に

百顔に思

糸結を以て板

